

を示している。

高崎市周辺地域は、その北西に榛名山東南麓に形成、発達して相馬ヶ原扇状地形が広がり、その扇端部より流出する小河川によって多くの低湿地帯が存在している。日高遺跡の周辺にも弥生水田が営まれた中央谷地の低湿地帯ほかに、数条の低湿地帯の存在が明らかとなった。小八木遺跡の水田跡も同様にこの低湿地帯に営まれたものである。小八木遺跡の北に位置する正観寺遺跡においても数条の泥炭質の低湿地帯が認められる。また高崎市井野町井野天神遺跡では、井野川に注ぐ小谷の低地に、現地地表下約1.2mほどにアシ等の累積した黒色粘土層が、認められ、その中に加工された板材、木材に付着、また介在して樽式土器破片が多く出土している。低湿地帯を開田した水田跡存在の可能性も考えられよう。

高崎市周辺地域における弥生中期後半から後期にかけての遺跡は、自然堤防、微高地上に多くの分布がみられるが、それに隣接する低地には多くの低湿地帯が存在したものと考えられる。この低湿地帯は弥生中期後半から後期にかけての水稻農耕を営む上で最も適した湿田土壌であったものと考えている。

井野川中流域に沿って検出された熊野堂、御布呂、芦田貝戸、同道遺跡は、河川縁辺へ帯状に堆積した黒色粘質土を利用して水田が営まれている。このなかで一面の水田面積1.0～8.0㎡の長方形小区画水田の形態を示す熊野堂遺跡を除いて、基本的には長方形の水田形態を示している。その田面積も30～40㎡ほどで、水田検出面積も御布呂遺跡では調査面積5,500㎡、同道遺跡では9,000㎡に及んでいる。水田跡の広がり、さらに広範囲に及ぶものと推定される。近接するこれらの水田跡は相互の関連がうかがわれ、井野川縁辺に沿って大規模に水田が営まれたものと考えられる。出土遺物は同道遺跡において後期後半の樽式土器、古式土師器と考えられる高坏脚部などのわずかな土器の出土が知られているにすぎず、日高、小八木遺跡にみられる谷地水田と比べ、出土遺物に時間差があり、また営田形態、その規模等、相違が指摘できる。これらの水田が樽式土器を使用する集団によって営まれたものか、あるいは古式土師器を使用する集団によって営まれたものか、浅間C軽石の降下にかかわる水田跡の終えんと合わせて、今後、解明すべき大きな課題である。

第8節 日高遺跡と周辺の弥生遺跡

日高遺跡の位置する高崎市は関東平野の最深部に位置し、東を旧利根川の流路にあたる広瀬川低地帯と、西を烏川に挟まれた高崎、前橋台地上にある。北西は、榛名山東南麓に発達した相馬ヶ原扇状地形が広がりみせているが、この扇状地には井野川、染谷川、八幡川などの河川が谷を刻み東南流している。これら河川は高崎、前橋台地上に至り、多くの帯状に延びる自然堤防、自然堤防状の微高地を形成、発達させている。弥生中期後半から後期にかけての遺跡は、この自然堤防、自然堤防状の微高地に多く分布を示していることがうかがわれる。(第210図)

1 中期弥生集落の出現とその展開

日高遺跡の位置する高崎市周辺地域において、弥生文化の本格的な波及、成立は、弥生中期後半の段階にある。

中期後半の遺跡は、竜見町式土器を出土する遺跡として烏川、井野川、染谷川などの河川によって形成、発達した自然堤防上、低台地上に遺跡分布が知られるようになる。

高崎台地西端を東南流する烏川左岸は、幅約200～500m、長さ約10kmほどにわたって自然堤防が続いている。この堤防上には、竜見町式土器の標式遺跡として知られる竜見町竜見町遺跡⁽³⁴⁾を始めとして、環濠の可能性のある幅約1.0m、深さ0.5mの溝を検出した並榎町巾遺跡⁽³⁵⁾、明確な遺構はみなかったものの、中期後半の土器を出土した下和田町城南小校庭遺跡⁽³⁶⁾などが知られている。また井野川自然堤防上では、堅穴住居跡4軒と幅1.4～2.0m、深さ1.2mほどの環濠と考えられるV字状の溝を検出した浜尻町浜尻II遺跡⁽³⁷⁾、及び群馬大学の調査によって中期終末段階の土器を出土した浜尻町浜尻I遺跡⁽³⁸⁾がある。染谷川流域の自然堤防上では、日高遺跡の南方約1.4kmほどある新保町新保遺跡の調査によって8軒ほどの住居跡を検出したが、その南側では自然流路と考えられる幅10m前後の大溝がめぐり、環濠としての役割をはたしたものと考えられる。また中期の終末的な特徴を示す土器を出土した日光町林製作所遺跡⁽³⁹⁾などが知られている。これらの遺跡のなかで、巾遺跡、浜尻II遺跡、新保遺跡では、環濠、および環濠と同様の性格を示すと大溝があり、環濠集落の存在が明らかとなってきた。中期後半段階の遺跡の在り方は、沖積地における低い自然堤防、低台地上に立地し、河川に近接した場所に集落が立地するところに共通性がうかがわれる。このことは水稻農耕もより発展した段階にあるものと推定され、山間地域に分布を示す中期前半の岩櫃山式土器を出土する遺跡の立地と明らかに異なりをみせている。

中期後半の竜見町式土器は、中期前半の弥生土器みられた縄文的様相が薄れ、畿内櫛描文の地方化した、いわゆる中部高地型櫛描文による簾状文、波状文が施されている。この竜見町式土器は、長野県北信地方に分布を示す栗林式土器と強い関連を示し、栗林式の影響のもとに、成立、展開したと考えられる外来性の強い土器である。特に中小河川による沖積土壌の発達した高崎周辺地域は、竜見町式土器を出土する遺跡が最も多い地域であり、集落立地、新保遺跡における農耕具の発見等からみて、稲作農耕もより発達した段階に入っているものと推定される。

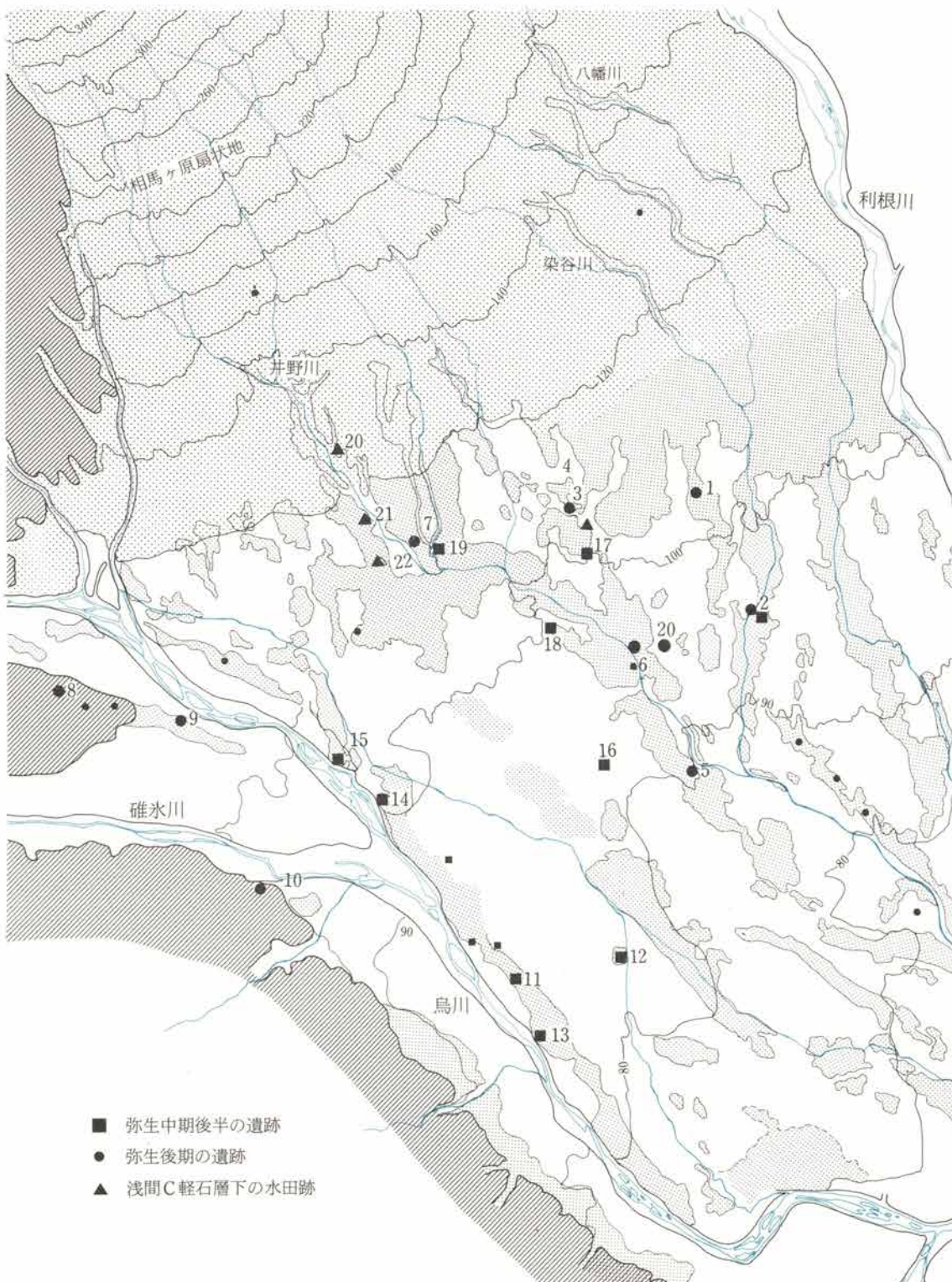
2 後期弥生集落の成立とその展開

日高遺跡出土の弥生土器は、すでに述べたように弱い櫛描文様が描かれた後期の樽式土器で、その特徴から後期前半から後半に継続して集落が営まれたことがうかがわれる。

後期樽式土器は、前型式の竜見町式土器を母胎にして発展、成立した土器であることは、中期終末から後期初頭にかけての土器にみられる特徴が漸次に移行することからも知ることができる。

周辺地域における後期弥生遺跡は、本遺跡の西方、後期前半から後期にわたる住居跡を検出した正観寺町正観寺遺跡。隣接して日高遺跡と同様、谷地形に浅間C軽石層下の水田跡を検出した小八木町小八木遺跡、西方、井野川左岸に立地する井野町井野遺跡、近接して井野川に注ぐ小谷の低地に泥炭質の黒色粘質土が確認され、加工板材、樽式土器破片を多く出土し、水田跡の可能性もある井野天神遺跡⁽⁴⁰⁾。その北方の井野川右岸に位置し、後期前半の住居跡、方形周溝墓を検出した上大類町北宅地遺跡⁽⁴¹⁾がある。これらの遺跡のなかで、正観寺遺跡、小八木遺跡、北宅地遺跡は後期前半の弥生土器が出土し、日高遺跡と同様、後期前半に集落が成立したと考えられる。

特に本遺跡の南、染谷川自然堤防上に位置する新保遺跡は、弥生中期後半から集落が形成され、後期初頭から後期後半、さらには古墳前期にいたるまで継続した集落遺跡である。弥生後期にいたっては住居跡数の増加、群集する周溝墓を含め、集落範囲が拡大している。また居住区を区切る大溝からは、製作途中にある未製品、破損した多数の木製農具などが出土しており、その集落規模からみて周辺地域の中



- 弥生中期後半の遺跡
- 弥生後期の遺跡
- ▲ 浅間C軽石層下の水田跡

弥生中期後半から後期の遺跡

- 1 日高遺跡 2 新保遺跡 3 小八木遺跡 4 正観寺遺跡 5 北宅地遺跡 6 井野遺跡
 7 熊野堂遺跡 8 剣崎遺跡 9 引間遺跡 10 御部入遺跡 11 竜見町遺跡 12 競馬場遺跡
 13 城南小遺跡 14 巾遺跡 15 上並榎南遺跡 16 日光町遺跡 17 浜尻Ⅰ遺跡 18 浜尻Ⅱ遺跡
 19 雨壺遺跡 20 井野天神遺跡

浅間C軽石層下の水田跡

- 1 日高遺跡 2 小八木遺跡 20 同道遺跡 21 御布呂遺跡 22 芦田貝戸遺跡

第210図 高崎周辺における弥生遺跡の分布 1:75,000

核的集落であったものと考えている。後期前半に集落の成立をみた日高遺跡は、立地の上からも新保遺跡と強い関連のもとに成立したものと推定している。

日高遺跡における水田跡のひろがり、昭和53年の史跡範囲確認調査のボーリング調査の所見では、谷地形に生成された低湿地帯の直線距離にして550～650mの範囲が推定され、また東側低台地に営まれた居住区の範囲から比較的小規模な村落跡と考えられるものであった。

本遺跡に隣接する遺跡は、南方約1.5kmほどの新保遺跡、約1.7kmほどの正観寺遺跡、約1.8kmほどの井野遺跡、新保遺跡から南西約2.0kmほどの北宅地遺跡など集落間は直線にして1.5～2.0kmの距離がある。このことは、黒色粘質土を利用して水稻農耕を営む上で集落の間に、相互に生活基盤としての広範囲な領域が必要であったものと考えている。日高遺跡周辺におけるこれらの遺跡は、新保遺跡を中核的な集落として、相互に有機的関連をもって高崎市周辺地域における弥生後期の農耕社会を成立、展開させたものと考えている。

浅間C軽石層下の水田跡が検出される高崎市周辺地域は、弥生中期後半から後期にかけての遺跡数が、本県において最も多い地域となっている。このことは榛名山東南麓に発達した扇状地を流下する井野川、染谷川などの河川縁辺に沿って堆積した黒色粘質土、あるいは扇状地扇端部周辺から流出する湧水をその成因とする黒色粘質土の堆積が、木製農耕具を中心とする当時の水稻農耕を展開する上で最も適した土壌であったものと考えられる。高崎市周辺地域の中期後半から後期にかけての弥生集落遺跡の増加は、この低湿地帯を利用して水稻農耕を営み、集落の拡散が図られたものと考えている。

なお集落の拡散は、高崎市若田原台地の⁴⁰⁾剣崎町剣崎遺跡、岩野谷丘陵の⁴¹⁾乗附町乗附遺跡にみられるように沖積地に隣接し、その比高差のある台地、丘陵にまで遺跡の広がりをみせている。これら遺跡の拡散が近年、小八木遺跡でみられる浅間C軽石層下の畑跡と考えられる畝状遺構とどのような関連をもつのか、今後の研究課題であろう。

第9節 おわりに

- 1 箱根以北初めての弥生水田跡の発見として、全国的に注目を集めた日高遺跡は、榛名山南麓の裾部に開析された谷地に生成、堆積した低湿地帯を利用して水田を営んでいる。

昭和54年、高崎市教育委員会による史跡範囲確認調査による所見において、谷地頭部に推定した溜池のあり方は、今日、山間地域にみられる谷地水田と本質的に共通し、初期谷地水田の実態を知ることができる。

- 2 弥生集落は、その出土遺物から弥生時代後期前半にその成立している。それ以前の遺構は、広範囲に及ぶ発掘調査にもかかわらず確認されていない。したがって、弥生水田の開拓もその時期にある。その継続は後期後半まで安定していたものと考えられる。

- 3 西側の北台地は、さらにその西側を狭い西谷地にさえぎられ、南北に長い独立状の低台地となっている。この北台地の東側縁辺には方形周溝墓、壺棺墓、土坑などが検出されて、一つの墓域を形成している。なお東台地北側にも墓域が存在している可能性があり、今後の調査課題となっている。

- 4 水田跡東側の東台地には、範囲確認調査によって住居跡群の存在が明らかとなっている。その範囲は帯状に延びる自然堤防上の地形に制約され、小規模な範囲と推定される。

- 5 出土遺物の、農具などの木製品、栽培・採集による種子類、獣骨類などから、水稻農耕、畑作、狩